〔研究ノート〕

ラオスにおける自然環境と社会経済環境の空間的相互関係

横山　智

Spatial Interrelation between Natural Environment and Socio-economic Environment in Laos

Satoshi YOKOYAMA

要旨

The Mountainous Region of Mainland Southeast Asia has been drawn attention from the scholars recently, and research results of Laos, which is used to be called "the forgotten country", are also being accumulated gradually. Keywords such as complex multiethnic country, mountainous country, swidden agriculture and the lack of basic infrastructures are often used as the representation of Lao's characteristics. For example, "swidden agriculture is practiced by the ethnic minorities in the mountainous area where infrastructure maintenance is insufficient"is the widely used description of socio-economic conditions activities of the Laos. Quantitive data concerning interrelation between swidden agriculture, the ethnic minorities, infrastructure maintenance and the mountainous area is not publicized in scientific papers.

The purpose of this paper is to provide data for discussing agricultural forms of Laos and information for comparing Laos to other regions in the Mountainous Region of Mainland Southeast Asia, and also to examine availability of these data by organizing quantitive data on the geographical configuration, infrastructure, ethnic characteristics and agricultural forms.

キーワード：ラオス、東南アジア大陸山地部、民族、地形、交通インフラ、農業形態

1．はじめに

近年、東南アジア地域研究者の間で、「東南アジア大陸山地部（Mountainous Region of Mainland Southeast Asia)」と呼ばれる、ミャンマー（Myammar）

のシャン（Shan）地域、中国雲南省、タイ（Thailand）北部、ヴェトナム（Vietnam）北部、ラオス（Laos）北部の5か国にまたがる地域に対する関心が高まっている。その地域が注目を集めている理由を以下に述べてみたい。

第1に、同一の民族もしくは近似の民族が国境をまたがってモザイク状に分布していることである。19世紀前半まで東南アジア大陸山地部は、タイ・ヴェト（Dai Viet）王国、ランサーン（Lan Xang）王国、ランナー（Lan Na）王国の3王国から成っていた（Stuart-Fox 1997: 6-19）。ランサーン王国は、現在のラオス北部を中心に、西双版納、タイ、ヴェトナムの一部も含まれていた。すなわち、東南アジア大陸山地部の各民族は同じ国に居住していたのである。ところが、フランスによるインドシナ統治によって、ラオス、ヴェトナム、タイ、中国、ミャンマーに国境線が引かれ、民族は各国に分散した。そして、元来類似の文化的基盤を共有していた各民族は、国策の違いによって独自の変化を遂げることになった。

第2に、東南アジア大陸山地部の民族は、いずれの国においても「周辺」に位置付けられていることである。国境線が引かれ、各国はそれぞれの国策で国を統治し始めた。それらの政策は、その国のマジョリティとなる民族によって立案され、首都もしくはそれに準じる都市を国の「中心」として開発が進められた。東南アジア大陸山地部の先住民族らは、人口で少数の民族となり、地理的にも中心から遠くなった。その結果、経済発展と社会基盤整備が遅れる「周辺」へと追い込まれた[1]。

そして第3に、上述の問題に起因して、東南アジア大陸山地部は、生業形態および社会経済の両面で普遍性と特殊性を併せ持つ地域へと変貌したことである。東南アジア大陸山地部は熱帯モンスーンに属し、自然環境面では等質地域である。そこでは、焼畑陸稲作、水田水稲作、小動物の捕獲、森林産物の採集、漁労、家畜飼育といった自給自足的な複合生業形態を有していた。それが、国境線が引かれて1世紀の年月を経て、内的および外的圧力によって、各国および各民族独自の変化がみられる。

同じ民族の場合、国が異なっても共通の文化と伝統知識を有するため、似通った変化を遂げていることも考えられる。それは、東南アジア大陸山地部の普遍性として説明できる部分である。一方、同じ民族でも、国が異なるこ

とに起因して、全く違った生業構造を呈していることも考えられる。特に焼畑による農産物生産や森林産物の採集などの経済活動は、ラオスの農山村では現在でも普通にみられるが、ラオスと同じ民族が居住する東南アジア大陸山地部の他国、例えば中国雲南省やヴェトナム北部では、すでに焼畑や森林産物の採集は限られた一部の地域でしかみられない。それは、東南アジア大陸山地部の特殊性として説明できる部分である。

ラオス農山村部において焼畑耕作が継続されている理由は、人口密度が極めて低く、かつ国土面積の約70%が山がちな地形で占められており、道路や市場のようなインフラが整備されていないためである。また、このような自然・社会条件によって、中央政府のコントロールが農山村部に行き届かなかったことも一因となっているであろう。

これまで筆者は、ラオス北部の農山村部において、焼畑で稲作を営むラオ（*Lao*）村落の農外活動導入に伴う生業構造変遷（横山 2001）、焼畑を経済活動の中心に据えるアカ（*Akha*）村落の生業構造（横山 2004）、焼畑安定化政策として土地分配されたカム（*Khmu*）村落の土地利用（横山他 2004）、道路へのアクセス手段を持たない辺境部でのラオ、カム、モンの3民族の森林利用と集落立地の関係（Yokoyama 2004）などの研究を行ってきた。いずれも、山地部の焼畑について論じた内容であり、ラオスでは、地形、インフラ、民族集団の違いよって、それぞれ異なった農業形態が未だに残っていることが明らかになっている。

一般的に、ラオスについて書かれた概論書などには、山地部は少数民族によって焼畑耕作が営まれており、メコン（Mekong）河流域などの低地部はマジョリティのラオ人によって水田が営まれていると書かれていることが多い。しかし、先に述べたように、中国雲南省やヴェトナム北部などの東南アジア大陸山地部の他国では、同じような地形で、同じような民族が居住していても、ラオスでみられる「山地部＝少数民族＝焼畑」、「低地部＝ラオ人＝水田」といった単純な構図で説明することは不可能である。ラオスも決して単純な構図ではないが、山地部と低地部の地形と農業形態の違いを記述しようとすると、上に示したような構図になってしまうのであろう。それは、ある面では仕方がない。なぜなら、これまで地形、民族、農業に関する定量的

なデータが少なく、かつそうしたデータ間の相互関係に関する議論も行われていなかったからである。

そこで本稿では、地形、インフラ、民族と農業に関する定量的なデータを整理し、ラオスの農業形態を論じる際の参考データ、もしくは東南アジア大陸山地部の他地域とラオスを比較する際の比較データとして使用できるような情報を提供し、それらデータの使用可能性を探ることを目的とした。そのために、最初に複雑な様相を呈しているラオスの民族分類の問題を詳細に述べ、次に地形的特徴、交通インフラの地域的差異、ラオスの農地利用の9割以上を占める稲作農業の地域的特徴を解明する。そして最後に、それぞれのデータの相互関係と使用可能性について明らかにしていく。

2．ラオスの民族とその空間分布

（1）2000年の民族分類

ラオスでは民族分類の定義が定まっておらず、センサスが行われる度に民族数が変化している（林 1998)。一般的には、タイ・カダイ（Tai-Kadai）系語族、モーン・クメール（Mon-Khmer）系語族、モン・ミエン（Hmong-Mien）系語族、チベット・ビルマ（Tibet-Burmese）系語族の4種類の言語族を基準に分類される傾向にある。しかし、幾つにも枝分かれした言語の樹状図をどこで区切るのかによって、民族数が47分類になったり、また方言レベルまで分かれた131分類になったりすることがある[(2)]。これまで、ラオスの民族分類は様々な混乱が生じていたのである。

ところが、2000年８月にラオス国家建設前線（Lao Front for National Construction）は、公式の民族分類として、４言語族を基礎に見直した49分類を提示した（第１表)。この分類を1995年センサスで使用された民族分類と比較したところ、２民族が他の民族から分離し、２民族が統合され、２民族が新たに増加し、そして９民族の名称が変更されていることが明らかになった。この変更は、（１）マジョリティを占めるタイ・カダイ系語族側の偏見が名称に含まれている、（２）自称で呼ばれたい、（３）今後新しい名称に変更して欲しいという希望をもつ民族の意志を尊重したものである。たとえば、名称変更によってラオ語で「小人」を意味するプーノイ（*Phou Noy*）と呼

第１表　ラオス国家建設前線局による言語系統を基にした民族分類
Table 1　Classification of Ethnic Group based on Ethno-linguistic Family by the Lao Front for National Construction

Ethno-linguistic Family	No.	New Classification in 2000	Census 1995			Remarks
			Classification	Population		
				Total	Ratio(%)	
Tai-Kadai	1	*Lao*	*Lao*	2,403,891	52.5	
	2	*Phuthai*	*Phuthai*	472,458	10.3	
	3	*Tai*				Branched from *Phuthai* group
	4	*Lue*	*Lue*	119,191	2.6	
	5	*Nhouan*	*Nhouan*	26,239	0.6	
	6	*Nhang*	*Nhang*	4,630	0.1	
	7	*Xek*	*Xek*	2,745	0.1	
	8	*Thai Neua*				Branched from *Lue* group
Mon-Khmer	9	*Khmu*	*Khmu*	500,957	11.0	
	10	*Pray*	*Thin*	23,193	0.5	Changed name
	11	*Xingmoun*	*Xingmoun*	5,834	0.1	
	12	*Phong*	*Phong*	21,395	0.5	
	13	*Then*				Not found in Census 1995
	14	*Eudou*				Not found in Census 1995
	15	*Bit*	*Bit*	1,509	0.0	
	16	*Lamet*	*Lamet*	16,740	0.4	
	17	*Sam Tao*	*Sam Tao*	2,213	0.0	
	18	*Katang*	*Katang*	95,440	2.1	
	19	*Makong*	*Makong*	92,321	2.0	
	20	*Tri*	*Tri*	20,906	0.5	
	21	*Jru*	*Laven*	40,519	0.9	Changed name
	22	*Talieng*	*Talieng*	23,091	0.5	
	23	*Ta Ooy*	*Ta Ooy*	30,876	0.7	
	24	*Jeh*	*Jeh*	8,031	0.2	
	25	*Brau*	*Lavae*	17,544	0.4	Changed name
	26	*Katou*	*Katou*	17,024	0.4	
	27	*Halak*	*Alak*	16,594	0.4	Changed name
	28	*Ooy*	*Ooy*	14,947	0.3	
	29	*Kriang*	*Ngeh*	12,189	0.3	Changed name
	30	*Cheng*	*Cheng*	6,511	0.1	
	31	*Sadang*	*Sadang*	786	0.0	
	32	*Xouey*	*Xouey*	45,498	1.0	
	33	*Nhahoen*	*Nhahoen*	5,152	0.1	
	34	*Lavi*	*Lavi*	538	0.0	
	35	*Pako*	*Pako*	13,224	0.3	
	36	*Khmer*	*Khmer*	3,902	0.1	
	37	*Toum*	*Toum*	2,510	0.1	
	38	*Ngouan*	*Ngouan*	1,344	0.0	
	39	*Meuang*	*Mone*	217	0.0	Changed name
	40	*Kri*	*Kri*	739	0.0	
Tibet-Burmese	41	*Akha*	*Ko*	66,108	1.4	Changed name from *Ko*, and
			Kheu	1,639	0.0	integrated *Kheu* into *Akha*
	42	*Singsili*	*Phou Noy*	35,635	0.8	Changed name
	43	*Lahu*	*Muxoe*	8,702	0.2	Integrated *Muxoe* and *Kouy*, and
			Kouy	6,268	0.1	changed name to *Lafu*
	44	*Sila*	*Sida*	1,772	0.0	Changed name
	45	*Hayi*	*Hayi*	1,122	0.0	
	46	*Lolo*	*Lolo*	1,407	0.0	
	47	*Ho*	*Ho*	8,900	0.2	
Hmong-Mien	48	*Hmong*	*Hmong*	315,465	6.9	
	49	*Iu Mien*	*Yao*	22,665	0.5	Changed name
Others				10,201	0.2	
Not Stated				24,084	0.5	

Source: Internal information from Lao Front for National Construction and National Statistical Centre 1997

ばれていた民族は、自称のシンシリー（*Singsili*）と改められた。しかし、この民族分類についてPholsena (2002) は、ンゲェ（*Ngeh*）がクリアン（*Kriang*）に変更された事例を紹介し、ンゲェは自らのことをクリアンとは呼んでおらず、新しい名称も正確には自称でないと批判している。このように、公式分類が発表された後でも課題は残っている。

（2）民族の空間分布

民族の人口構成を各県別に整理すると、地理的空間に対応した民族分布がみられる（第2表）。ラオス全人口の65%以上を占めるタイ・カダイ系語族の民族が、主要民族となっている県が多いのは当然であるが、北部6県、中部のボリカムサイ（Borikhamxay）県とサイソンブン（Xaysomboun）特別地区では、カム、プータイ（*Phuthai*）、モン（*Hmong*）などの民族が人口の第1位を占め、ラオス最北のポンサリー（Phongsaly）県やルアンナムター（Luang Nam Tha）県では、アカが第1位とほぼ同比率で第2位の数を占めている。また、南部のセコン（Sekong）県でも、カトゥ（*Katou*）、タリアン（*Talieng*）、アラック（*Halack*）が人口割合の上位を占めている。民族の混種度合いも第2表から読み取ることができ、ポンサリー県、ルアンナムター県、

第2表　県別民族構成（1995年）
Table 2　Ethnic Group Structure by Province, 1995

Regional Division	Provinces	Population	1st Group (%)	2nd Group (%)	3rd Group (%)	Total the Upper 3 Groups (%)
North	Phongsaly	152,848	*Khmu* (24.4)	*Akha* (20.0)	*Singsili* (19.4)	63.8
	Luang Nam Tha	114,741	*Khmu* (24.7)	*Akha* (23.9)	*Lue* (15.8)	64.4
	Oudomxay	210,207	*Khmu* (57.7)	*Hmong* (13.1)	*Lue* (12.2)	83.0
	Bokeo	113,612	*Khmu* (23.8)	*Lue* (20.6)	*Lao* (13.4)	57.8
	Luang Phabang	364,840	*Khmu* (45.9)	*Lao* (28.8)	*Hmong* (15.2)	89.7
	Huaphanh	244,851	*Phuthai* (31.5)	*Lao* (30.0)	*Hmong* (20.3)	81.8
	Xayabouri	291,764	*Lao* (63.4)	*Khmu* (9.0)	*Lue* (8.1)	80.5
Center	Xieng Khuang	200,619	*Lao* (44.3)	*Hmong* (34.2)	*Phuthai* (10.2)	88.7
	Xaysomboun Special Region	54,088	*Hmong* (53.7)	*Lao* (19.4)	*Khmu* (16.7)	89.8
	Vientiane	286,564	*Lao* (63.8)	*Phuthai* (14.0)	*Khmu* (12.5)	90.3
	Vientiane Municipality	524,107	*Lao* (92.6)	*Phuthai* (3.1)	*Hmong* (1.4)	97.1
	Borikhamxay	163,589	*Phuthai* (41.0)	*Lao* (40.2)	*Hmong* (9.2)	90.4
	Khammuane	272,463	*Lao* (59.4)	*Phuthai* (21.7)	*Makong* (13.4)	94.5
	Savannakhet*	671,758	*Lao* (57.5)	*Phuthai* (18.9)	*Katang* (8.7)	85.1
South	Saravane	256,231	*Lao* (60.0)	*Katang* (13.3)	*Xouey* (8.1)	81.4
	Sekong	64,170	*Katou* (24.3)	*Talieng* (21.8)	*Halack* (15.5)	61.6
	Champasack	501,387	*Lao* (84.8)	*Lavi* (4.9)	*Xouey* (2.4)	92.1
	Attapeu	87,229	*Lao* (36.9)	*Lavi* (17.4)	*Ooy* (16.4)	70.7

Source: Census 1995, the National Statistical Centre
* Savannakhet province is sometime categorized as south region.

ボーケオ（Bokeo）県、セコン県は上位3民族を合計しても県人口の約60%にしか達していない。これは、他県と比較すると4位以下の民族も人口が多いか、民族数が非常に多いことを示している。これらの県は1位の民族と2位以下の人口に大差がないことが特徴で、どの民族が社会的に優位かを判断するのは困難である。民族に関する空間的特徴を議論するためには、人口以外の指標をも考慮しなければならない。また、タイ・カダイ系語族以外の民族は、極めて人口割合が低く、彼らが居住する地域は、いずれも山地部である。このような現状から、山地部を空間的視点で捉えるためには、モーン・クメール系語族、モン・ミエン系語族、チベット・ビルマ系語族の文化と社会経済動向に注意を払わなければならない。

（3）低地ラオス人・中地ラオス人・高地ラオス人

ラオスでは、言語族を基準にした分類とは別に、各民族が居住する位置によって、低地ラオス人（*Lao Lum*）、中地ラオス人（*Lao Tueng*）、高地ラオス人（*Lao Sung*）に分類する3分法が1950年代より用いられている。この3分法は、政府見解では正式な民族名称ではないとされているが、最も一般的な民族分類としてラオスの人たちに浸透しており、ここで触れておく必要があろう。安井（2003）によれば、3分法が使用される以前は、モンは「メオ」（猫を意味する）、モーン・クメール系語族の人たちは「カー」（奴隷を意味する）といった蔑称で呼ばれており、3分法は民族による区別をなくして国民国家を形成しようとする気運の中で生まれたものとされている。この分類法を言語族の分類と対比させると、低地ラオス人がタイ・カダイ系語族、中地ラオス人がモーン・クメール系語族、高地ラオス人がチベット・ビルマ系語族およびモン・ミエン系語族に相当する。

ところが、この3分法では、言語の違いから意思疎通さえできない民族同士が同じ分類に属してしまう。低地ラオス人と分類されるタイ・カダイ系語族の8民族は、ラオ語を母語とし、互いの意思疎通は比較的簡単に行うことができる。しかし、高地ラオス人と分類されるモン・ミエン系語族とチベット・ビルマ系語族の人たちは、同じグループ内での言語による意思疎通はかなり困難である。モン・ミエン系語族に含まれるモンとイウミエン（*Iu Mien*）

は、共にモンゴロイドで中国からラオスに移住してきた民族である。言語も中国語起源で同じであるが、イウミエンは漢字を使用するのに対し、モンは文字を持たない。そしてお互いの言語を使用しての意思疎通はできない。チベット・ビルマ系語族の人たちもモンゴロイドで中国から移住してきた民族であり、アカ、シンシリー、ラフ(*Lahu*)、シラ(*Sila*)、ハーイー(*Hayi*)、ロロ（*Lolo*）の言語は似ているため意思疎通が可能だが、彼らとホー（Ho）とは意思疎通できない。ホーは漢字を使用し、言葉自体も中国語の一派生語だからである。

モーン・クメール系語族の人たちに相当する中地ラオス人の場合、高地ラオス人よりも複雑な状況にある。ラオス国家建設前線に所属する民族学者への聞き取りによれば、彼らの母語の類似性は大別すると第3表に示した8つのグループに分かれるという。そして、各グループ間の意思疎通はかなり困

第3表　モン・クメール系語族言語の言語類似性
Table 3　Linguistic Similarities in Mon-Khmer Ethno-linguistic Family

Group	Ethnic Name*	Characteristics
1	9 *Khmit* 13 *Then* 15 *Bit* 16 *Lamet* 17 *Sam Tao*	Their languages are similar and comprehension reaches a level of 80-100%. They live mainly in northern part of Laos.
2	18 *Katang* 19 *Makong* 20 *Tri* 23 *Ta Ooy* 26 *Katou* 29 *Kriang* 32 *Xouey* 35 *Pako*	Their languages are similar and comprehension reaches a level of 80-100%. They live mainly in southern part of Laos.
3	21 *Jru* 25 *Brau* 28 *Ooy* 30 *Cheng* 33 *Nhahoen*	Their languages are similar and mutually comprehensible. They live mainly in southern part of Laos.
4	22 *Taliang* 24 *Jeh* 27 *Halak* 34 *Lavi*	Their languages are similar and mutually comprehensible. They live mainly in southern part of Laos.
5	37 *Toum* 38 *Ngouan* 39 *Meuang* 40 *Kri*	Their languages are similar and mutually comprehensible. They live mainly in southern part of Laos.
6	25 *Brau* 31 *Sadang*	Group 31 understands the language of Group 25 but not vice versa. The population of group 31 is about 18,000, while Group 25 has a population of only about 700. They live close to each other, and the smaller group, Group 25 cannot survive without acquiring the language of 31, the bigger group. They live mainly in southern part of Laos.
7	36 *Khmer*	This group lives only Champasak, and has a population of 3,000. They speak Cambodian Khmer.
8	10 *Pray* 11 *Xingmoun* 12 *Phong*	They only understand about 10% of each other language. Group 10 live in Xayaboury, group 11 live in Xieng Kho District of Huaphanh, and group 12 live in Huaphanh and Borikhamxay.

Source: Yokoyama 2001
* The shaded parts show the largest ethnic group in each sub-group.

難であると述べていた。また、グループ6の特徴にみられるように、近隣に居住する異なるグループ間においては、社会、経済、文化のあらゆる面で人口の少ないグループは、人口の多いグループに影響を受けやすく、結局、人口の多いグループの言語を生活上の手段として会得していく傾向がある。

低地ラオス人、中地ラオス人、高地ラオス人の分類は、1950年代には、民族の空間的居住特性を良く示していたのかもしれないが、各民族は戦争の影響や経済的な背景から移住を繰り返しており、今では多くの中地ラオス人や高地ラオス人が低地平野部で居住している。3分法は簡便でわかりやすいが、民族の特徴や性格を議論するような場合、そして農業形態の比較などを行う場合は、適当ではないといえる。

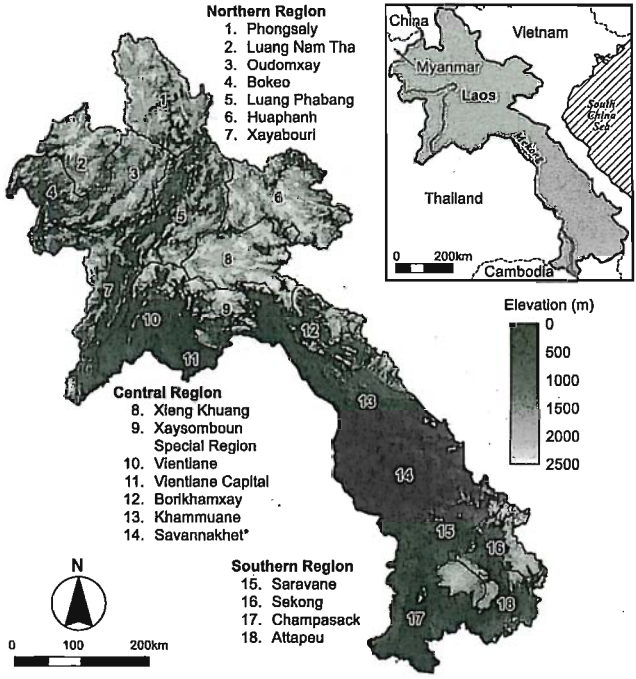
3．ラオスの地形・交通インフラ・農業の関係

（1）地質と地形

ラオスは国土面積の70%以上が山地である（第1図）。ラオスの山地はアンナミア（Annamia）と呼ばれる古生代の造山活動が起源となっている。それが中生代になると、新たな造山活動により現在のインドシニア（Indosinia）陸塊の一部とされるアンナン（Annam）山脈、シェンクワン（Xieng Khuang）高原、ボロヴェン（Bolovene）高原などの中高地地形が形成された（ワークマン 1991)。東南アジアの中でラオスの地形区分をみると、大起伏山地に一部低起伏山地を含むアジア大陸山地部と白亜紀に最上部に堆積された厚い岩塩層のコラート（Khorat）高原からつづく平原部の2地域に区分される（古川 1989)。

第1図に示したラオスの地形において、アジア大陸山地部は北部7県、ヴィエンチャン（Vientiane）県北部、サイソンブン特別地区、ボリカムサイ県東部にまたがる地域、そして南部のセコン県に該当する。そして平原部はヴィエンチャン県南部、首都ヴィエンチャン、ボリカムサイ県西部、カムアン（Khammuane）県、サワンナケート（Savannakhet）県、サラワン（Saravane）県、チャンパーサック（Champasack）県、アタプー（Attapeu）県の中央部以南のメコン河流域に広がる地域に相当する。

南部のチャンパーサック県には凸状のボロヴェン高原が位置しているが、



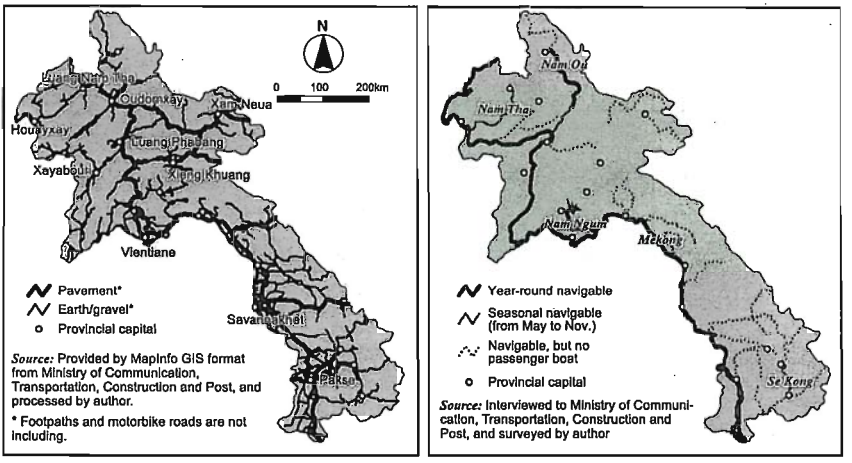
* Savannakhet province is sometime categorized as south region.

第１図　ラオスの地域区分と標高
Fig. 1　Provinces and Elevation of Laos
Source : GTOPO30 DEM,U.S.Geological Survey

この高原は第四紀に基盤岩を打破して噴出した玄武岩の火山性台地であり、地形的に起伏がないテーブル形状を呈している（岩田 1960)。したがって、南部のボロヴェン高原はアジア大陸山地部の景観と異なる。なお、ボロヴェン高原は旧フランス植民地政府によって、早い時期から開発が進められ、植民地化と同時に冷涼多雨の気候を利用したコーヒーやカルダモンなどの栽培が導入された[3)]。そして1950年代には、それらの生産物が主要輸出品になるまでになっている（Vercouttre 1959)。

（２）交通インフラの地域的差異

アジア大陸山地部とされる山地と平原部とされるメコン河流域は、社会基



(a) Road Transportation Network　　(b) River Transportation Network

第２図　交通ネットワーク（2001年）
Fig. 2　Transportation Network,2001

盤整備状況に大きな差があり、中でも道路整備の差は著しい。ラオスの交通インフラ自体極めて貧弱であるが、山地部は特にその整備が遅れている（第２図）。舗装道路は平野部メコン河沿いと県庁所在地レベルの都市を結ぶ幹線道路に限られ、山地部では自動車が通行可能な道路が敷かれていないか、たとえ敷かれていたとしても未舗装である。道路が敷かれていない地域では、河川交通に頼ることになる。しかし、公共交通機関として、船舶が運行している河川は、メコン河、ター（Nam Tha）川、ウー（Nam Ou）川、グム（Nam Ngum）川、コン（Se Kong）川の５河川に過ぎない。ラオスには、他にも船舶の運行が可能な河川は多いが、人口密度が低いため、公共の交通機関は存在しない。

道路アクセスの可否を、北部のウドムサイ（Oudomxay）県とルアンパバーン県において村落レベルで調べたところ、道路へのアクセスを有する村落は全村落1,941村のうち949村だけであった（第４表）。およそ半数の村落は、道路へアクセスできないような辺境の地に村落を構えている。ウドムサイ県では道路へのアクセスが可能な村落は42.1%であり、そのうち年中通して道路にアクセス可能な村落はわずか25.7%であった。ルアンパバーン県では、

第4表　道路へのアクセスを有する村落数（2000年）
Table 4　Number of Villages with Road Access, 2000

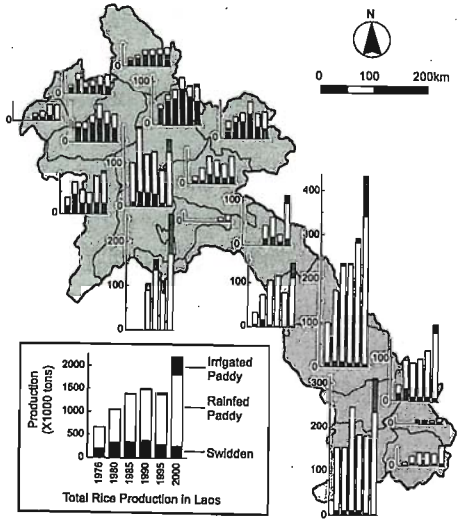
Province	District*	No. of Villages	Number of Villages with Road Access (Total)	(All Year Round)	(Dry Season Only)
Oudomxay	Xay	154	86	55	31
	La	64	26	15	11
	Namo	101	50	18	32
	Nga	100	13	3	10
	Beng	99	55	38	17
	Houn	169	78	53	25
	Pakbeng	80	15	15	0
	Total	767	323 (42.1%)	197 (25.7%)	126 (16.4%)
Luang Phabang	Luang Phabang	126	123	113	10
	Xieng Ngeun	100	65	64	1
	Nan	79	47	39	8
	Pak Ou	71	48	38	10
	Nam Bak	160	70	62	8
	Ngoi	158	61	47	14
	Pak Xeng	109	54	51	3
	Phon Xay	92	23	10	13
	Chomphet	84	49	30	19
	Vieng Kham	147	60	52	8
	Phou Khoune	48	26	8	18
	Total	1,174	626 (53.3%)	514 (43.8%)	112 (9.5%)

Source: IRAP Project Database
* The seat of the Provincial Office is shown as a shaded district.

ユネスコ世界遺産に登録されているルアンパバーン市街地を含むルアンパバーン郡では、道路網が整備されているが、その他の郡における道路網整備は著しく遅れている。ルアンパバーン県全体では、53.3%の村落のみが道路へアクセスできる状況であった。

（3）農業形態の地域的特性

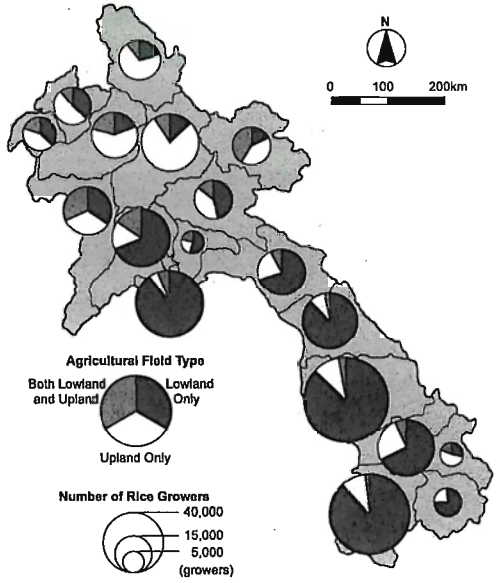
ラオスでもっとも重要な産業とされる農業では、山地部とメコン河流域の差異が更に顕著にみられる。ラオスの農業は稲作に特化しており、水田もしくは焼畑でのコメ生産が全農地面積の91.6%を占める（Agricultural Census Office 2000）。第3図に示すように、1976年に660.9万トンであったコメ生産量が2000年には2,201.7万トンへと、わずか25年でおよそ3倍に増加している。その期間に人口は、1976年の289万人から2000年の522万人



第3図　コメ生産量の変化（1976-2000年）
Fig. 3　Change of Rice Production, 1976-2000
Source：National Statistical Centre 2000,2001

に増加した。コメ生産量の増加率が233.1%であったのに対し、人口の増加率は80.6%で、過去25年の間で急激なコメの増産が実現したといえる。

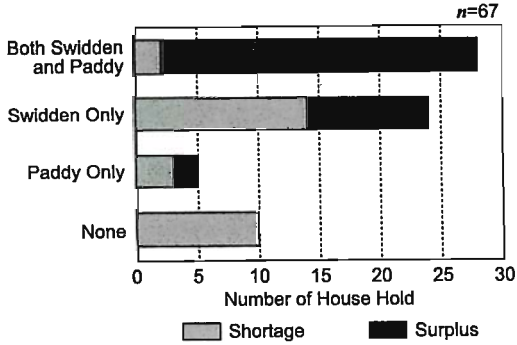
この変化を地域別にみると、メコン河沿い平野部のコメ増産は過去5年間に実施された天水田および灌漑水田の開発によって成し遂げられていることがわかる。しかし、急峻な地形を呈する北部および南部の山地部では、平地部と比較して水田造成が進んでいない。そこでは、わずかな谷地を開墾した谷津田と焼畑に頼らざるを得ない状況で、著しいコメの増産はみられない。コメの増産には大きな地域的差異が存在しているといえる。



第4図　農地種別の地域的差異（1998年）
Fig. 4　Regional Differentials of Agricultural Field Type,1998
Source：Agricultural Census Office 2000

地形的に山地部と定義されたほとんどの県では、焼畑耕地比率が高く、また焼畑のみで稲作を営んでいる農家が多い（第4図）。これは「山地部＝焼畑」もしくは「低地部＝水田」といった地形と農地の関係を表すものである。しかし、山地部も単純に焼畑だけで稲作を行っているとはいえない。なぜなら、焼畑と水田を組み合わせた耕地所有形態も存在するからである。これは谷地を利用して水田耕作を行っている山地部の農家が存在することを示したもので、そのような農家は、北部に多くみられる。北部ウドムサイ県のラオ人の村落で全世帯の耕地種別とコメの過不足を調査した横山（2001）の結果では、焼畑もしくは水田だけで稲作を営んでいる世帯の多くはコメが不足していたのに対して、焼畑と水田の両方を所有しているほとんどの世帯では、

コメの自給が達成できていた（第５図）。山地部では、水田面積が限られているため、水田だけでは自給ができず、不足分のコメを焼畑によって補っていることがわかる。



第５図　ウドムサイ県ポンサワン村における所有耕地種別の違いによるコメ生産量過不足（1999年）

Fig. 5　Surplus and Shortage of Rice by Different Types of Rice Field Holding in Phongsavang Village,Oudomxay,1999

Source：横山（2001）

４．むすびにかえて

ここまで、ラオスの民族分布、地形、交通インフラの地域的差異、農業形態の地域的特性を明らかにしてきた。

ラオス全体のスケールで民族分布と地形の関係を捉えると、地域的な傾向は比較的明瞭であった。地形的にアジア大陸山地部と呼ばれる山がちな地域には、ラオスでは相対的に人口が少ないモーン・クメール系語族、モン・ミエン系語族、チベット・ビルマ系語族の民族が居住し、平原部と呼ばれるメコン河およびその支流によって形成された低地には、ラオスのマジョリティであるタイ・カダイ系語族の民族が多く居住している。また、地形とインフラの関係から、平原部は道路網が比較的密に形成されている一方、アジア大陸山地部では県庁所在地レベルの都市間を結ぶ一部の幹線道路しか舗装整備されていないことが明らかになった。道路を敷くことが困難な場所では、河

川による交通もみられたが、人口密度の低いラオスの山地部では、公共交通として船舶が運航している河川は5河川に限られていた。これらの結果から、モーン・クメール系語族、モン・ミエン系語族、そしてチベット・ビルマ系語族の民族が多く居住するアジア大陸山地部は、山がちな地形で、交通インフラの整備が遅れ、道路へのアクセスが困難な村落が多い地域と特徴づけることができるであろう。

次に、地形と農業形態の関係についても、高い相関があることが明らかになった。平原部の農地は水田が卓越しており、アジア大陸山地部では焼畑が卓越している。そして水田によって稲作を営む平原部では灌漑化が進んでおり、近年は急激なコメ生産量の増加をみせている。その一方、地形的制約によって水田の開発が困難なアジア大陸山地部では、コメ生産量の増大はほとんどみられなかった。

しかし、地形、民族、インフラの間にみられた空間的特性と地形、農業形態の間にみられた空間的特性を、直接的に結びつけることは避けたい。筆者が行った研究（Yokoyama 2004）のように、集落の位置と世帯の生業構造が明らかになっている場合は、限られたスケールの中で民族と農業活動の関係を定量的データから説明できる。しかし、本稿で示したような県スケールのデータを用いて、特定の民族が焼畑耕作を主としているのか、また水田を主としているのかを断定するのは困難である。山地部を主たる居住域とする民族でも、谷間で水田を営んでおり、反対に主として低地に居住するマジョリティのラオ人でも、山地部の村落では焼畑を営むことは珍しくない。したがって、農業形態に関しては、地形との相関がより高いという結果にとどめておくべきであろう。あえて、民族と農業の関係に触れるとしたら、農法との関係に言及するべきである。一筆の耕地に作付けする作物種、使用する農具など、民族の特徴が表れ、民族分布の違いによる地域差も浮かび上がると考えられる。

謝辞

本稿は、2003年に筑波大学に提出した博士論文“A Geographical Study on the Basis for Existence of Mountainous Villages in Northern Laos”の第1章と

第2章の一部、およびYokoyama, S. 2001. The Situation of Ethnic Minorities in Laos. Ministry of Health and JICA Study Team eds. Lao Health Master Planning Study, Progress Report I. Vientiane: Ministry of Health, A6.1-A6.8.の一部を加筆修正し、編集したものである。なお、本稿の一部は、第107回東南アジアの自然と農業研究会（2002年10月11日）、および平成16年度熊本大学文学部地域科学科ピアレビュー（2004年7月7日）で発表した。

本稿で用いた資料は、文部省（現：文部科学省）アジア諸国等派遣留学生として、ラオス国立大学社会科学部地理学科に派遣された2000年10月から2002年9月の間に収集したものである。また研究費の一部は、2001年度（財）トヨタ財団の助成研究A（D01-A-046）を使用した。この紙面を借りて深く御礼申し上げます。

注

1）ラオスでは中部、南部と比較して北部山地部が収入と社会基盤投資において貧しい状況にあることをBourdet（1998）は統計データから分析している。

2）この4言語族によって分類した近年の研究としてChamberlain（1995）およびChazée（1999）が挙げられる。47の分類はラオス政府によるもので、1995年センサスに採択され、131の分類はChazée（1999）が導いた。

3）日本もボロベン高原開発に興味を示し、移民を送り込むことも検討された（岩田 1960）。

参考文献

Agricultural Census Office 2000. Lao agricultural census, 1998/99: Highlight. Vientiane: Steering Committee for the Agricultural Census.

Bourdet, Y. 1998. The dynamics of regional disparities in Laos: The poor and the rich. Asian Survey 38: 629-652.

Chamberlain, J. R., Alton, C. and Crisfield, A. G. 1995. Indigenous peoples profile: Lao People's Democratic Republic. Vientiane: CARE International.

Chazée, L. 1999. The people of Laos: rural and ethnic diversities. Bangkok: White Lotus.

Pholsena, V. 2002. Nation/representation: Ethnic classification and mapping nationhood in contemporary Laos. Asian Ethnicity 3(2): 175-197.

Stuart-Fox, M. 1997. A history of Laos. Cambridge: Cambridge University Press.

Vercouttre, C. 1959. Present state of Laotian economy. In Kingdom of Laos: The land of the million elephants and of the white parasol, ed. R. De Berval, 459-468. Saigon: France-Asie.

Yokoyama, S. 2001. The Situation of Ethnic Minorities in Laos. Ministry of Health and JICA Study Team eds. Lao Health Master Planning Study, Progress Report I. Vientiane: Ministry of Health, A6.1-A6.8.

Yokoyama, S. 2004. Forest, Ethnicity and Settlement in the Mountainous Area of Northern Laos. Southeast Asian Studies, 42(2), 132-156.

ワークマン, D. R. 佐藤　正訳 1991. インドシナ半島の地質構造. 都城秋穂編『世界の地質』385-898. 岩波書店.
岩田慶治 1960. ボロヴェン高原の人文地理－開拓と民族－.『人文研究（大阪市立大学)』11(2): 159-183.
林　行夫　1998.「ラオ」の所在.『東南アジア研究』35(4): 684-715.
古川久雄　1990. 大陸と多島海. 高谷好一編『講座 東南アジア学 第二巻 東南アジアの自然』19-50. 弘文堂.
安井清子　2003. 民族. ラオス文化研究所編『ラオス概説』171-205. めこん.
横山　智　2001. 農外活動の導入に伴うラオス山村の生業構造変化－Oudomxay県Phonsavang村を事例として－.『人文地理』53(4): 307-326.
横山　智　2004. ラオス北部山岳部におけるアカの生業構造と農耕.『総合地球環境学研究所　研究プロジェクト4-2 2003年度報告書』166-174.
横山　智, 田中耕司, PHOMTAVONG,S. 2004. ラオス農山村地域における土地・森林分配事業と焼畑安定化.『日本地理学会発表要旨集』65: 21.